２０１８年（平成３０年）１０月２３日　火曜日
デーリー東北　１１面　掲載

文学にアプローチ

男女の凄絶な師弟愛

八戸学院光星高３年
福士　湧太さん（18）

最近の作品や夏目漱石、内田百閒などの近代文学を交互に読んだりしています。途切れ途切れに読むと作品の世界に没頭できないので、時間を見つけて一気に読んじゃいます。買って最初に本を開いた時の匂いやページをめくる時の感覚が好きなので、電子書籍よりも紙の本を選んでしまいます。

現代文の授業で教わった「耽美主義」に興味を持ち、耽美派の第一人者といわれる谷崎潤一郎の本を読みたいと思い、手に取ったのが「春琴抄」だ。

この小説は、「鵺屋春琴伝」という小冊子を基に、一組の男女の凄絶な師弟愛を描いたもの。その男女というのは、美しく残忍な盲目の三味線師匠春琴と、喜悦を隠して尽くし抜く奉公人佐助のことである。作者が通りがけに2人の墓をお参りするところから始まっている。

春琴の指導は峻烈を極め、三味線指導の際には佐助をののしったり打ったりが日常茶飯事であった。どれほどの苦痛を受けても激励に対する有難涙を流す佐助には疑念を抱くが、彼のマゾヒズムを超えた一途な愛を否定することはできないだろう。

物語は第二部で急展開を見せる。美貌と意地の悪さで敵が多くいた春琴だが、ある日、何者かによって顔に大やけどを負わされる。「お前にこの醜い姿を見せたくない」と涙を流す春琴に対し、「必ずお顔を見ぬように致します」と答えた佐助は、数日後、自分の両眼に縫い針を突き刺した。

これがこの作品の中で、美の極致であると私は思った。同時に文学の今まで踏み入ったことのない領域に達したような心持ちがした。

人生についての訴えや問い掛けが、大きなテーマとして取り上げられている文学作品も多くあるが、耽美主義に触れることで、私は今まで知らなかった文学の一面を見ることができた。

私たちは本を読むことにより、文学作品の中の人物、雰囲気、情景、思想、愛や美など、数多くの作家が生み出す唯一無二の世界を、存分に享受することができる。

本を媒介として、自由に文学に浸ることができる私たちは、読者として幸せ者だと感じた。これからも、その幸福を存分に味わうために、私は本を読みたいと思う。

私の一冊

「春琴抄」
谷崎潤一郎著
1933年発行
（写真は旺文社「刺青・春琴抄　愛と青春の名作集」）

デーリー東北新聞社提供